

序にかえて

— 階段・人間・希望 —



中央区長 大河原 徳 三

◇ 震災直後、区役所にかけてつきたとき、区庁舎の外壁はほとんど被害がないようにみえてホッとしたが、中に入って見て想像以上に損傷が大きいのに驚いた。

それでも区庁舎が何とか使用できる状態で残っていたのはせめてもの幸いであった。

エレベーターは三台とも動かず階段だけが頼りという日々が何か月も続いた。

その間は市民の出入りも多く、日中はもちろん深夜でも階段は、物資を運ぶ人、連絡に走る人、一步一步息をつきながらのお年寄り、元気に大声で話し合う若いボランティアなど多くの人達であふれた。

冷たくうす暗くあちこちにひび割れの入った“階段”はさながら震災の縮図であった。

◇ それにしても、一人一人の人間がこれほど大きく魅力に満ちみちて映ったのも震災ならではのことであったように思う。

みんながそれぞれに個性的で優しく、忍耐強く、機知にとみ、なによりも頼りがいがあった。

誰もが感動で涙する場面も多く、言葉は荒々しくてもお互いにいたわる気持ちは通じ合っていた。

傾いた家屋、足の踏み場もない道路とほうらはらに、人と人が声を交わし助け合う姿は、日頃高層ビルや高速道路の便利さに目を奪われがちな私たちに、都市の中での“人間”の存在感の大きさを改めて想い起こさせてくれたともいえる。

震災から一年、さまざまな人間模様が体験記録として発刊されている。中央区としても少しでも早い時期にとりまとめているのはやはり震災を体験した私たちの責務ではないかと思う。その意味で、この記録は、資料の散逸を防ぐための内部資料ではある

が、それぞれの業務に携わった職員の想いもこめられている。

震災を通じて私たちはお互いに信頼を深め合ったように感じる。そして何よりも地域の人たちや全国から応援にかけていただいた人たちと一緒に危機的な状況を切り抜けることができたのは生涯忘れられない得がたい体験となった。震災で出会ったすべての人に心から感謝の気持ちを伝えたい。

◇ いま神戸は復興への新しいステージに立っている。まちの復興にあたってまず心がけねばならないのは、やはり高齢者への対応であろう。中央区にも3800戸に及ぶ仮設住宅が建ったが、そこでも明日への不安を抱くお年寄りの姿が目につかぶ。

お年寄りの生活が少しでも安定し、日々健やかに、生きる喜びを実感できるように、市政の第一線にある私たちは、お互いに連携して市民にとって最もわかりやすい頼りがいのある窓口としての役割を果たさなければならない。

恒久住宅の建設もまた大きな課題である。公的な住宅もさることながら、民間住宅の建設は、本格的な復興への大きな足がかりとなろう。一戸でも多くの住宅が建つように私たちも情報を集め、知恵をはたらかしていく必要がある。

復興はいまだ緒についたばかりだが、幾多の困難をのり越え、以前にもましてすばらしい神戸をつくりあげていくためには、理想や希望はかかせない。

市民一人一人の胸の中に“希望”の2文字が燃えつづける限り“美しく活気にあふれた神戸”のまちは現実のものになっていくにちがいない。